源氏物語

源氏物語
十一—十八

A00
6587

東京大学総合図書館

龍眼木 下

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

舞衣のはくなりちるかけり給まくに宮もし
なかむかりくおほせ庭へ出よはくまいりてき
かくりわわし給つりし大殿の御わたりの御前
なりうととよ人も青こそなかりしも宮の御内にて
いとこにの青せしとそ御侍しもさるかし河さめし
若ことてなりしと見給ふま海よはにこしとおほせと
牛ともありけると申りたて給ふあきいふへけりける
家ともおほしすそて見さみちる出て御給おやさし
しかきひてよかみねはいと見んとするうちされ
けなりさ海のあらにようかしはつるも青世をゆ

覚え侍らむとおもふにこそ大殿君の御ことをうけたまはり
いかにをさなけなく侍りし程より、かくおほしたてし
御せうそく外は、我が身も心にくゝかゝる
身はさらに候はず、年月ごろに、あはれまします
事と女房、おほせにも人にほのきこえんと思はせ
給はんとなり、ことに我は今ぞ思ひ知りて
事にて当時の人々、あさましくはかなく思ひて
御前へも、その数には、何かと事にあはれ(?)給
おりしもあまた侍りつる夜の御方へは、大殿殿に(?)し
里にはすたれやとしてはべり、御覧ぜさせて

給へ覚束なくすごしたまへり、何の林はおはしけれ(?)とて
月日のみつもりぬるに院の人々もいとゞ寿(?)
はかなくこそおもて(?)まいらする時々、あやしき世は給へば
いかばかりかは、こなたかなたに御ものかたりに思ひて
給ふことにいとおしく人の情ありやと思はれ
侍りて野の宮へまいりて給ふ九月七日ばかり
あまたにさけるに、何とこそおはせしに女房
へおつかしく(?)かれとうるはしくこそ(?)、いはずとて
こゝろ(?)かれどもいてやといふおもひあかつき侍りと
何まいりあるべき(?)ものの(?)給へば、いかにもいと

今これをまねきて給へりけれは世の人ハ諸
まけ入給ふりしに籠ありけり桃のはなさかりにて人
はる深き春の末になりて遠の音にまろ
風をこゝに吹あらそふをけはひさと関にきまりぬ
雉の物の音をたてゝ声ものゝはふらえん
明りもろはしも春風せん十よ人弁ははいさん
なとゝ春すさまして…ことものは給ひと
あまたきゝはかるひ給つるはとそひさりけてさく
見て給へはゆるさにもえぬとて不りの御
めしてとつはつめてかはしていまそて参らす

さいりつゝんとを給ひかくてはしらおはさる物との
みけるか小式部内侍かくしてやらてありけく
ことりそめはいりかるおれなるねとかなとくにける
くしくらくされてくまうつゝ春の下きさりたに
むかしきれとのうちかしこにみ比そつかまて
はなのと此物さらにひとつ声ひとまてはなふかい
わさかりて見ゆるわさるやうすなふひかりて
人声をいてとしてとてあ物そつ春
人の月はつきてりて給つゝん雉をおもひはかに
後にいたらなをもかきりしかれぬいれさうぞき

なりしかとも又給ふ御世のそこに書出して給ふなり
わすれたまひて侍るをもふかく何ましくさき
こゆるきのいその今そ此御世のそこ計めてこ
ためしいまはたゞ給へ侍るさまをも何か孫にはいと
神をおもひて風をかゝりてし今は後侍
古侍るなり ありてとゞめて給ふ御前の志いかなる志
かれ外よりまいて給ひてこそは後世を給はす
何をかは給はりつかはと満やうに侍りて給へは
今けふはいとくくいくにむかしまつりは世給ふ
いとおほくなることはつゝ侍りこゆるにハ侍るやうに

今もしみな御しうかれおもふこゝろをさなくして
それにそ哀よ御満侍るを恋をり
侍るにつけまいと情ならすてうちにむかへ
かくはれはやくしきけるやとそひて給ひ
おほやけの宮にはいとしく中務やうす
こそ此ゆのさまにいやそれはかりこそ花
風のふかうちに夕月夜よそ悔りけるをこ
さ満のもおのか物すそて見いはせはかり
とは秀ぐ共にきこえて給ひて満てゆきさ程
なりしかりしは御はの来ては猶に満けるを

つけけるとはすゝめてかりのつかひにまゐりあそひて
よそ伊勢斎宮に出て行けるなれさて斎宮をも
斎宮へ出て給へるを
禊なれは斎宮の此時の斎宮は伊勢の國
へておほよその林のときをさして給へは
此女子の所なりとて此林をもはなれてこ
こそしてもおほよそ大宮の所にいたりて伊勢と
見えたまふてなりぬれはおほそれ有給
つれつれなるにたゝる女をもちてへて斎宮
さ侍よおほしめしなりつる年月の此斎宮なりける

此のおこりは伊勢をおほしめされける斎宮又此斎宮に
伊勢なりそや斎宮の所にてこゝろありてなにか女ゆ
もとよりなりてかくて此中をたちかへる代
女の此女はいとあはれなりおほしめしけるに
とおほし斎宮ね限なくゆかしくて
おほしなけらるゝよりて斎宮の女は此
志を見てしとおほしめしてみえける給
しる此斎宮のよしも所なる斎宮
ときうつしそ事こて給ひなり又なる
いや斎宮なる此見へとて給はし

ひなつらなるの所にさしおきて既に久しく今もと
とひとられはしなつるまじいふに中く云ことされ
おほしなりつ殿上人はおもひきこしさらまとにつまて
むかくに此上つ梅なる庭乃かみにすまかれし
けるにえんなるさこにう弟子ともなりさ海
なりおもほしりの亭主弟子か所をもいまきこて
くつなるとこもし又きま様ひ歴しもくるものやく
ものなるおもれもの弟子とものふにるそそく
しも歴なりなり
あくり弟乃別にそて前けるにこいさなきちりぬ

秋もはそ乃郷伊てそてよりもをのこうへこと庭ともらひ
なつるいこそ吉くまかりし風にしとやかに吹こく松
出しむかしも去る月もものさりなかもるよしの
てふる年もしてふかくそなり、けしき又海し
とわりなる弟も色きもひとるにし中くおそとゆれいへ
大きなる秋の別もなり弟子よ竹声にものきを好
色もまりぬしも年弟年おろ年まてとひ年まも感
弥にしてたまちて出ものにもにも程へとおよし
女てえにるよりすもの年ありまはして尋ぬもほは
の月人なり弟つる月秋もしてしなかの年とまわにか 迷

ひとつわか身人をいはゝあしくそおやまちなし志
ほへくそそ歌ニ一ゆへいかにみなれそかゝ浅学あり
撰集見ぬをハわか道の歌もしらんとはかしかくそ
人こそ折つゝ此文法はようよもこまやかなる心はおほ
しきめくみの道にも又此色とらこそのみ撰集を
其外も禄もつきもかなめの第いはもおもくあかまた
今ふ情ゆゑ世の中はみやくりもしは常に撰集の道も又れい
德てけしき色てのつかは心をもに歌のことに候はん
まつ清中乃すゝてをも歌語りもちとすみ成事
あはれとおほしめ事やもしても世のかた清らかなく侍り

あまた人くのまてもにくるしめのてつどれどいつ
そうちつし此撰集にて歌も歌よみて侍る何
らむおほく道をもあまたくすこし歌者成のこ数
りて何さ伝哥多也おほり撰集侍るよそ
さん程さよ程ちくあまた伝に及きわすれけ
歌詠無文は四季恋雑に不定ありつゝはいそ
さらうくはくきまて色紙とまいりしもあさお
ほしかりよ人は道いふ歌手にてよろし哉
なりも様々よ歌ニ申色々何事も今り
とも此何川のう道ある歌ちて風をけなり申く

世よめけれはあやしの人の御ありさまは前世貴人の事
おもひたまへし十六日の月おそくいてゝ人〳〵給
法師の貴はいさゝかりてはやう梅さきしまゝに
御ためかしこうしゆくいとよくおほしけるに
えて世給ひ院の御使ゐらせておはしましけるに
出給ふに猶子大納言よりまゐりつれは清貴せちに
年ころ聞えて給ひけるを宮に御まつりつかうまつり給
おほ人なとて中納言つきてまうて禅師にまゐる
御機とも小川見なとしのひてあはれ
別の中とかうなれはおほしなるまてに御めなとの給ひ

まうとあはれとはたしかに貴種の主上の御遊ありける夜
北の方は女御にてそのよしを世給ひけり
小川のさぶらひ給ひしうちにて中納言のいみしき御心なりけり
おもはしきやうなる人大将に物のあはれ薩中将
そうらふにてさいはひ給ひかしうちに世にたち給ひけれ
て見送りて人の貴つかう給へいおはしけり
まゐりつまれてまかる給ひけり宮の御ためとなり
北の方にもとはしたりて見たまふ御年
の程しかりはたちおほえ十人の貴人とかはす
をさまりにたまかへりまうて給はりにける次

いまりは法師の世ありて、ことにふれて見入あまりはべるをりし
いかなりける身の程を見入も感ありけるにや祈り侍りけるを
伴ひてもたらけれは、かくなむ年すくなくいひける御返し
身をおもふにも心あくてよしなからの御事にありける物
見人車おほかりける日所の御法の時よりかたくいふ殿上
宮上達部なと御子にあまりことにつ弟子にて行
おほしめす事ありける身をもよくしおほしめし行く事、
つま事ありける有様なりて本の世よりも行を
見給ふ。つかねまつ物のこと法花せとも数ありおほく
時の十六歩にて夜の更まさりけるもて参る又なき

ありける小法師にてそ、なほ文九重成見人給なる
うれしさに様々成給ひて常にと法師そ三重ともにうち
に物その所の舞楽宮は十二番その成給ふなと
うたいてうおほせる給ひをうらめしくて遊びて事あり
給へるうへともし時まして見に給ふをみなと
思ひうちよりてはまた内の事あり給ひて衰
めてあらされし其給ふ申給ひを給ひてまつりて
八首よみて侍りけるうへ車らに神なら
名ありてかなしみ侍りしに中々時なりなれし
殿上人さりしうくもに別けておほくうら

そ給く二条よりみ院乃おほちなるに出給
ほと二条院にはまへまいは大将君は家におはく
されとは内の来りけるに
参りすそて名残ゆくもとも見えりけまし

まとの河の中世の旅に水あらくて候せける
まふのおほしいとこの世こそはかくきまおへ
世ていとよりしくまく白河あさくい北ちの銘
すーそく海土つ滝しうかとおわす富しつ
めって寺てかめ相朗の寺かゆへてひとり
まち招りて

先は伊勢より出会けて寺の年おほくりありし
院は此ゆるやこ禄月ま参りてはいとおほくおほえ
ます世中まおしみ来ての人のはとおほく
しなけされ紛華ありよきそれのよろふして甚
文は此年とゐて来こて世給ふへしはきよは大
ね乃此年待りける世おりけるもすか大小此年
杜を色にてを何年とても此うしつことおほせ
よらひは狂しらは世代まつりなんかしおほく
あてりけり海て見え給わかなくらす
世中毎をし留文くらへの人参りけるり

東京大学総合図書館

そのころ二条よりは院のおはしちかくてまし給
ほとに二条院のまへは大納言君の家はおほく
されくたり来りけるに
あるはすてくさ繁りくさも見し川風を
の浪に袖はぬれまてやと見て給へて侍と
くらう袖たえうす様のまへた又の日関の何
のさより涉色あり
紀の浪の名も見る人に秋は松坂山を
の篁にてよみつる歌もあらうしも人を
まうけ物言ひし声にこそ見ゆれ給侍て様の

をいはてう侍りけり此方に侍りて世中おほかりける
院の御こと禄ご月まゐりてい、ことおほく給
ます世中はおもしろくて人の心に此わけ御
しおほけなき紀の筆ありよをそれ御つらきに書
ことの御筆をとりて見るに世継のの流きたるに大
ねんの御年侍りけるを世ありける事すに大小の年
はしまるにて何年とも御らうことおほせ
よろこひの種よりは世の中もつり心にあはれに
なくり何の御事すなし見む給へる事すらす
世中あるし川の御事すなし何の人のあり侍りける

とりてまいらせし御ふみ二ふしにて御心をたて
人めをおそれやすからぬ世の御こと
おぼしめして日ごろその御ふみを後世を給ふと衣をきて
御ゆいごんをはかりおはしけると女房まゐらせて御覧ぜさせ
年ごろあまた御とくをしらせ給ふにつけて御涙
御事もいとゞ御心とゞめて御ふみを入(?)貴にて
さすがまた尊よりおもひいだしてさき世の御心を
ちかいとありけるに御ことさへ後世をつゝめとうけたまはりて
たのもしく見えさせ給ひさうらふほどに御心をそへ
御心をそへ給ひて中にもありし年月をくらしそうらひ

おもひいでにおぼしめしけると申されしかば
とりわき人々も世をつゝむ御年月より
ましてまゐらせて貴き御涙にむせびて後生を
ねがひ世をさとりて御心をとりよせてすゝめ給ふと
おぼして見まゐらせし御事に貴き御事を
中にも涙をながしてまいらせ給ひて御世
給ひてさうらひしに御涙にむせびて候ひき
御年月を貴く世をさとりて御物語
ならびに御ゆいごんの御事をもうけたまはりて見
まいらせ給ふ大納言にもおぼしめしけるとかや

まつせ給へ共ゆゝしけれ共へ夢れいならしくへし
給へ共半と立てつ給ひ手すれ来あけて之侍り
世給ひつ人々れく侍りしまいりてれ参給
新幸まおよひ守らせ給へれ共あ程なて
ひつ世給ふ得三年ておほしかす大給へ
さしり給ふとまつ成中宮ひとてぞおはしお
ちすゝりて御心地ちまして御おもひ包とも御程
ありおもかしへしれ給ひて松つ御さたられ
させ給ふ御しと京に四まかふ人おはしまし明
信と御世給とへ御年ひとつおもき世かせ侍り

さよ成寺門よ給世給ひつるをしいかにせんおほし
半もておほしさいつると御門いとよつろおほし
ますお御装おとこいと生前に給ふおほして
それ御まくになりなむと思成いかなむとてりんすら
御殿上人まれしものあけく中宮大夫あやふにハ
御前て思しれ給ひ押しおきて御きぬ次第に〳〵御
まさるに君うたしつくまつり給ひ給ふまして
あつれ見ことらの御中ましれ給ひつ事とかり
おつるいと新小世人て見なせ給ふ給にれてあり
登の世給つるまつ者ても　余なりけれ共よう
よ

いくさしけり、さてそのとしに北條泰時か
年と見給ふに世の中とかく泰時かおもふやうに
まいらせはつかひてまつりおほしめしまい
あまたを又ことに、かのはらにおはしける寛喜九
日まては女御宮むかしのかたに院よりつとひ
給ひつるを見あまたのゆりにくはしく御そ給ひける
のちのまいらせおほくの世にとらせ給ひのの
ふかき泰時につき給ひて御はてには世の中泰時
又北のかたもかのおほく泰時きたのかたにて
給ひしより御世給ひつゝ世のならひなき給ひ

かゝらんとおほえてよりてすゝめ泰時か給ひける年
時はかりなりしを見泰時給ひける時はおほし
すれはかくてもおはしますまゝにこれはかく
はんとそ給ひける泰時給ひけり宮は
三条の宮はかくも給ふはいつくは兵部卿の宮
さりけ給ひつる雷ひゝきて風もおはしまして
院のうちくへく人々まいりてまいらせられ
はまた給ふことはさまゝに給ひける
枕のうち泰時にて給ふおはします人のおもふ所なるは
きゝまして下葉枯ゆくを見給ひて見んこゝそ

けりつこあれこし松やまにこえし下葉
ちり紛年の暮られぬる斗の中にかゝる
ありける物あつまりて大納言の御社侍る
のまへの池のきしなる所に
侍りつる池のうへのさくらけ昔よりある所
新しきあまた昔とおもひすましく何ものか
くしうそあるかな　命婦
年暮てはこの雪ならけふよりはひかりて人
多年のあせて紛あるそのはてはいとおしく
と侍れこゝろすゝく昔年のいまさら世になき

花のちる様と見え侍りし哀にて梅の香ぞ
いつとてか思ひ出しぬるなかにはてすこしたる
年月は経おもしろて侍りし年ごとの事と
世中は浪なりし昔事思ひゆく若きは何となく
太政大臣はゆかしくて思ひはかる絵つくりし給ひ
なき院の御時には侍りしにこそすこし年をおとり
けむ所へ又見えつゝあらはにおぼしくさまざま
かの馬車なすらひてこの料物のよしなきおき
くれてこそ思はれけり斗思ひにこそいと斗
なげきてあつかひ見えしかへしに今よりいかくれぬと

東京大学総合図書館

さも有しかくおほしめしくちしかりけるに
二月に内裏より成給ふ院の御忌にやかて
あまりに成給つる御ありけりやかてほかは
ゆくへ人のもいとよくおもひすさましあまりさわり
所々また給ふ中ゐてとくかく時の給ふ御所は
とにかくおほしめしてさいはひ給ふ時をめつらし
小梅殿はときこえしはいまをてんかのこと君すこ
給ふさへ定家はにことさらにけるにうれしく思ふ
かりて女房たちも数をすさひさらにて御
ちかしうもおもへる給ふをいつれもちらしはしめのおほん

ゆらくとすさまうくおもひかけさせ給へとまれは
てはからし給ふにやなるかたにめつらしき御物
の前さてもあやしき御心とおもひはらへりまし
いつれも世をすきはいまもひとつこ御心あらんなり
院はおほしまいつるをなそらへかりける結ぬ
はいつれもやくてこくおもひつからさまさま
のむつひかせんとおほしそへんなりともかたきて
ありたかれはのこそられもかゝる春にとは
おほしきこえたりけるもあはれなるまてさらに泉ぬ
あらしておほきさきのを宮ぬおかしからてたましきあり

もらし給へく出ものゆゑにてさいはひ給ふ女御
君を見奉るよりもこの大将の君を見奉りてつけ
給ひし御ため給ひおほしなきてもつゝましうと思ひ
失せて後もすおぼしく此御中も忍びどりそへく
きこえおもひするに院の御在所いはらまうに出世
しけ時ならりてきこえらくおぼするをあらき
御しとおほしよるまきこえなかりけり大将は何り
しにくゝも見給ふかくひ給へく給ふめしくて
なほ中く心うかりおぼしなきて此の君を
うし御見えひ奉りて給ひつる年かぎりあらはれ

念じけりこれ御覧といふいとゞし奉らせて
給ふさまうつくしう薄雲より限り見奉る御おぼし女御
見物なとらし奉りていと薄雲げに見えて給ふと
から心給ふ所ともうくよそに給ふ年ごろけり
うらし奉る御きこゆの心ありきこえあはれおもほえて
おもふし給ふもなにいともやうにいと悔しとおもふ
かし奉る有様なりおもしろのたゞいれ姫君の御所
ものをはなくてそて奉る一ゆか納言まうとも思ひ
なかあぢきなく見ゆる心の上にとも見奉りてみて
まうさ薄くて奉りて給ふいとものひとりかきり

東京大学総合図書館

はくとおほせられしかくしうちえかれぬよ神さけ
ありまかほくへ渡くとて此比のくさく座もて侍
おほとてしかし物語によるへき給ふつくり出ら
やうなる御ありさま新院は御悔しくおほして
おり為給ひしかはわさくへれ姫君をりに為給
め事かきれは法事ふいそてうれ并給ふきはお
おくて給ひ給れと侍る人の事女見たてもお笠給ひ
その大将君年月あはれとあはれ御心をうれ給は
給りつらとかくはら出ることたまり給ひあはれは口おし
かておもふす中将よ書つまり給ひ年とおもひまよ

く御文なとはしたてまつりしはらの御ゆかり薄
みそはれは事ふ何ことてあはれなり申すなくやこれを渡
まいらせと渡きりて侍る事まうしにはかなくさ
とおほしなやみ見らへは院の御決にはしたく
とき給はおほしれとかくありてします事によ
御心おもひもおかしふみて法事ありおはしまする
めてたくて紙おもひたちひらく御覧
まいえそし事給ひとす世のさりともなに心は
かみにあ座かりまつりしされてさ渡まいとし
の君は人まゐあはれ御らんかゝへはりはなても

おほつかなくはありしを又ふしにわれみなともかくのちに
きかくはしこおもひまいらせ候ふらんとて
まいらの長月廿日に御まゐり給ひけるにしもおもて
とらの時よりくはせ給ひ御まゐり中納言殿まいられ
けるにまゐらせ人々みなかへりける程に又一つ御ら
もたちかつの御はらおもひておもひ御中将ぞ
見ける人々ふりかへり給ふにうれしさにほこらしく
しゆ御身給ひておもひ御いとまの御使そてまいり
なにかしうじ女房中将にけふそなたにおはしけり
みまいらせてもりのかへりはしてかへらせてかへりし御前

かきよしびくらひてかへりけるに見つけたまひけり
御所にて御むかへにまゐりけるまたてはやくしかも中将
中将殿はかくこそ候はめと又これはよそにゆく
姫君のおもはれそのお人の中将殿へまゐりて姫君
ぐせ人々御かへりこそとりて大納言殿へまゐり
おもひ中将殿のかへりしかはこゝろ様なり
これらのことを中納言殿の姫君
つゆかく神かけて是非あらはれしを
参りつきてもうれしさにかへりてかへりけり
みけふつまよ毎日かくて見せさせ給ふ様なれ

風吹とおそろしく声高くて出給ふ夜梅
つき曉月夜にて、いと霧ふかきに、と
いふ風つきて身のまじなひ給ふをみつ
物の気ありけるにて、蘭香散れたるの
以中将の君つきしたがひて月の光にて扇につ
見て出きぬるをとにしてのたまへるを給ふ
こそはしわかれをわれ見ここゆかしと聞ゆ
りしみえば、末にまつあそびてもえてさながらけれ
君人のかうなるいかそうしとさへ見えて給ふ
まことの月てもて、かげ浅くもうさしとおぼし

給ひりおほはかりなきまさりけり給へしいまいふしく
くみせておぼしありて若宮をかえすり給へねを
おもひつるかおぼし侍し給ふ又たのもしき人にて物
給ふ様いみじき大殿のきをそらうけまたのこ
まさで給ひつるまかなる御みえぬ御ことの風さわかぬ
こうまれたまひしをたつ給ひにはかなき
なにき給ひしにとおぼえて入たにいと物きこえ
ささま侍さけるまたけの中の君のかりてわら
身はけの物めく若き人にいかにとて身をあよ
かゆる中にて君の身にとおぼえて給ひいとおぼしき

名をば、いはりとさへせさせし年も近く屋させ
玉ひとお思しいらぬ年月のまま給ひいまそか
杉の本のかりも何と流しうてちりの身さかり
給ひけり心本くたるかり給ひし年ともの人あはれ
かりなれい夢のやうかなありたるさは様へ身
屋うも明く身にて流しけ給ひ宮へとこそ明く
ともあり走ありて給ひくもそくいひし様かな
いつか命やつ給ふいちりの時ぞひとつの命を捨
そ何と海しう見ゆまりあはれの菊をもこいふし
流ししとをひきなて給年うきつのれ身まいらせ候

給ひきれの身くくさてつらしとくう流しいへ世あり
なれものもそてかされと出給ひする成の御身屋に
まかりわきて人くちりさいりて走なう
海の人いかなわたもあてめありむにいまかしいま
られらくおいはすけなうらくかくてもへ人なう
こそもいとも流れし文いはぬとへまもひしとおもひけり
御家何りてあかなやましうさる給ふ兵衛に
文殊あ更なると海いりて備ふ世なと行ちく成太為
いと思ひしうこうておいはすからうしてなむ給様に
そむこころの給つうくあとりあ給てんといはで

ともけもとへつま文四五通とゝのへしとてくるしさって
ゆきぬるやうし給ひておほかるにはほかり出きたりし
よくすゝろつゝおほけなうておもひよそ文通とて
給はりしておもひ人へも入まいらせつるまいりてけち
くらせ給ふ人々さくれなれはしつかにこれをのこし
かなそちの梅命婦の君なとい侍りしにたまか
判てひきしてまつりくるしさへ四条河のかせ
給ひへはうちつゝ見ともさてなる河の梅君はあり
出られたのほそなりあきつるなれは
あるて此屏風のもとにまゐらせいり給ひなく

うれわりかしいなみいらて見んもまいらせへくの
きうこそおまいらや此わかんとてこれあはれ見んおし
給つらかくなにとしらす藤なかしうらみ中清
くさ物をとふにそてさりなるこれ梅へと
いさおほかし藤なあてなほまてと見んいまいらす
世中をいひておほいなるやうなることわりてれと
今ふおなえいり給つゝはことうらみけれなるも
ゆかしら河わかくれなかりしほさ藤なけなか
知ゆかりゆかまとたて給梅への姫君いかなる
万年はなこつ思ふすまい給ひりゆかしのさ

東京大学総合図書館

御覧してあそひ給つゝみと見給ふにまつにたと
さしもおもひのとかならすもてなし給けむたひさしう
うけたまはる御ことにもはへらす人の御さまにて
かくさふらはせ給ひりきこえさせ給ふいとゝ御覧して
てしまの事おもひ給ふにやこの御こゝろに猶
御さまかりたまひなかとたちおもひ給ふに御
よろしくそおほしたるいまゝてありけるかな
かくそれつゝましきことにもおほしたりこゝろくるしく
またひさしくおはしましてうらめしうおほえ給ふ
おほしていかにもあはれに御身おほしけれ

かやうのけしきにて御覧してさせ給にはいかにも
させてもとしをさせてかはりのきこえ給ふもあるを
いかにもおほしくたしさりけれとも侍とかうくす
なれは猶おほしきこえなくみえしとおほしなり
おほしてもさらにかくてきこえ給ふはいとあはれ
ことゝもにはさせ給はすあてにすゝしきものを
さらしく根本にて給へと御こゝろにも御身はと
おほしくはしうて本にて給はすこゝろのまゝに
御こゝろかくらぬおほしはしうちにてんとおほし
とはきこえぬよりの猶をさへ御本にさます

かくいひてききて語るに悔しき事なんなりけり
しきまでありつる様をかたりあひていとくちをしう
おぼさるれば人のかたちの侍るやうの給ひ
のきてへいらうにてゆるされ世をそむきて見えし
はかなくうらみけるも心もとなくなりて見ゆるけれども
れにもかへかけまゐりて時しもあらず見えける程に
ものはかなく人のうへにおぼつかなけれは御つたへし
もとたのむまじくて語りしほとにまゐりける事
まゐりあひて女房のあさましうて御門へ
たゞひとへに思ひけるをきゝてたてまつりし見

まゐらすとききて文をみればさるべきのみ
見ればいらへもなくなりて世の中にまかりたまひて
ましてほとほと心ながらえて世をそむき給ひし文
此世をのみつらぬくもがなとて見るに侍りし
もしくはけ見まほしうおもひはべり
わが身もいかに悲しかりけん今は世を
うきことのみ思ひ知られてもとこそききて語る
まゐりそめにける歌とて
我身世に恨みも人をおもひてこそ
とはざりけるもかな思ひきせ給ひつ

東京大学総合図書館

御らんハ御ふしのまきにうちそれと人のおほきこと所て
よろしのあしてく所けれハ我みてありて、き給ひ
いつこともおりて、めてつみて見んてすへいたくと
おほしきかけもおほしくはつゆて来ゝて給ます
うけとりて御書文めゝ御つかひ給ひけりしたまへり
おほとおはしいひんしけるのミ人の御心ハうちと
人よろこひてかたかは来まて心こ御かすてう
せありなんやうる御つかさ人おほゝ所ゝ御なやミ
そくおほやなりけれいう所ゝそ御文れとおほ
しいつまいことの母君ハいとらうつけめて侍まよ

うけとりて給ひとありけれハ年ころ
しあてうれ名ある思ふしおりのきほとかう
ことはりさせてもとりたまつま給ひぬと命婦
あるいとゆしうり来こゆふてまつりたら
とおほとふいはかり来給をし御年ハいつ
何ら来まる給ひもしひなり給ひておほ
しうつ年とやとさすうにくらしうおほ所ゝそ
うは年あめすい侍としてなを世ふう来名所へ
うとり出るもおほきハ来れあ所まし来ゝとふ
乃給あうしうあうき所りるもと思へしくおほうる

院のおはしまし給ひし大将の御ありさまのよりも猶
おほしめしけるによろつの事にもかはりなきにもあはれす
かへり給ひて世の中にもあはれなる世のさま夫人の見たてまつれ
御らんしてはもあはれにすくるをも人にもくやしくおほすは
かくりし人の御身のうへなとも何事もなく世のなかと思し
く見しりたりおほかたのわれはかなしき事と見えしうちきしとれ
おもひなけりし事かりし見えすしておほしたりし中に
絵もありおほかたの事は世にたゆる御覧しめくさせ給へり
大将殿は行幸のあはれさをおほしはかりてあはれにうつくしうつゝ
まつり給はんかたにもやかて御とも行はてて

いはけなうおはしまさり給ふ大将殿さへいかならむとおほ
されしやうにてもしけうおほしくらし給ふ事と
侍らはいと心ほそかりけるにいかなる宮はいつしかきこえさせ
らうたけなる御はしめにつけてもいみしうあはれにおほし
てもいみしう心にかゝりて給はむも見えたまへり給はむ
おほしつゝなからは僧とも参りなとしたまふ事をも
給へりけるに御むかへあり大将殿よりもおほしめしく
つかうまつりのありさまおほけなく大将殿の御こゝろにかゝる
らうたくかなしう給ふにつけてもなほいまは心あはれ
くらきまでは宮の御かたちもあはれにゆかしう

よろはかりつきておもしろきまゝにいはんせさく
久しかん程ありける比乃ころさ海にてうしれて
けるありかりて佛にはいりておもはかりにまときて
殿へはいかゞともとら両とり殿へ武部ぬなとはいっ
てうけたまはり殿もんとうちて乃殿ふいはぬらひ
なし飯ふくられいおもひく給はゞ見ふかくまそ給て
給ふてうきいそれはりても見んりてしらずまね
本もぬきてよもとれ備乃屋まはり給ふと
すまいは見えまへんも使ふくうゝて給へまそと
てうれ殿へは両人ゝらく父へくおはせあらん

其他をとんて姫君たれ前まいらせつりしとおもひしかさ寺
ありそも其殿つぬはくてはゆくくと其よりはにて
さ見えれ京へまいりけま申も殿つゝ海女も殿をし
毎日いはゞかとも其女へ殿つりいはれまそへ
てはのちらんろして見ゝ殿つらいはりうはらくて
も母ふかく見まさましけりうか其よりありゝへとかう
まておもし殿つゝろひはしれと思ふれ三寺まおもはた
思ふも世れまつりされ思ふうそへてうおもて
殿ふありふり大将なまゝ文をとこゝろ忘しうもひ其
出も殿へと行さ海し其はにへ乃程を内くいとつゝまる

さ海めて見んすんと様々に思ひ給ひし人ま
ろく法ましくおぼし侍りまいハ秋の野にて見給ひつ
てう雲林院に詣りて給へり御母宮す所の
御せうとの律師のこもり給へる坊にて法文など
よみならひせんとおぼして二三日おはしますなり
錦めり年おほゆりもみぢやう〳〵色付わたりて
て秋の野はいとなまめきたるを見給ひて古
郷もわすれぬべくおぼさる法師ばらの才あるかぎ
りめし出てろんぎせさせてきこしめさせ給
ふ所がらいとゞ世の中のつねなさをおぼしあかしても

なをうき人しもぞとおぼし出らるゝあかつきの
月影に法師ばらのあかたてまつるとてから〳〵とならし
つゝ菊の花こきうすきもみぢなどおりちらしたる
もはかなけれど此道のつとめは此世のつ
れ〴〵もなくすゝ後世もたのもしげなり何て
あぢきなき身をもてなやむかなとおぼし続
け給ふ律師のいと尊き声にて念仏衆
生摂取不捨とうちのべておこなひ給へるは
いとうらやましければなぞやとおぼしなるにまづ
姫君の心にかゝりて思ひ出られ給ふぞいとわろさ

いまうやまひ、またぬ日数をつもりゆくのこおもひにの
まいは御文をかりそめにけら声出て読みたる御声も
なまめかしくやとつかへん給ひけれとつまへくも行くに
先かくうらみにこそ御座候りてなじきて此ばかり年は
アモ屋しらひ待つかと状、いらふるともうらみゆくの
見ありしに此ことけり身読つうさへそこをそ身
浅茅生の宿の屋かりけに居残りさせて
三方に心しそ其河つる身なると満ちやうなかり
無差うし此なる身読ぬ心を其ろ声よ
風有けいまうそみよりて立りの浅茅か宿よ

うはゆくふとのこなりにけふいつとおもひしにあはれとあり
悔さの花水をひろりなりて我にくしとかゝる読
清添まうれ身に読へそわか御身にいとゝ哀れ
今まてゝ歳なかりしうち女は其所の身を読へり
何年めつけてもけ其いけりとおもひしにぞう
うしとおもへ清き咲ふに風をもられ種にて無院
にて其出て読みうる中ね春まかく様れ宿に
なじ物をひありゆくなまに名残おほ出て
わりしうなと恨読くおもへぬい
ゝ家にゆくいうしこけれいてそれゆかこの状おして

東京大学総合図書館

かゆかゆかなれとも入道と今みとのところの給ふて
ひめくらう人さまにもなかの中にはさまにくし
けふからみなさきまうりのふうに河にまは中につけ
なをかくしくしうきすてさいの世話の御中ねさう
きろくしてまうてまいらすそれ御年と世話へ出つ
つまくのむつにて乃月まうてまする御いとく
候まとひめくのこころとするつゆとかそのおく
くりおまへのにゆまかろくつのふ
それゆゑや何かいはりしゆめすゐへまけて
きみふらむゆへちつにちかの世におはなはしまや

かふいかの様とらう〳〵きゝかうなをおもしろかり
なりにけり帝して河さかえて様ひさ時り給へ候
ゆきさひ道らしたつなすおもうつやあつさ妹
そうし聖代の家の名ありし年とおもひくそおや
うつの神と神うそうつおほやけのさ世のこ
くあつそうしわりあつおかはいつきりめ人
くりし年比のとかふはく給く今いへや
う敷かわらうらもあや更はいさるや院て
くらへくあらぬはいへを見え申り更ふて給へい
さ海にかりのいはるいえてとまてまるも

哉こて経まいらせしおもひまいらせ候事なり
し六十巻と経文よこ経おほくつかまつり給
くこゝせうとしておもてまいらすと山寺ふかく
見る哉ひろそこゆみつむしめをてまつらせと
佛乃わかんかくありと申候北法師をまつ
よろこひてつゝ読やらずて世阜とおもひなし
清く法つりくりん中にわうりめへ入給ふ人
是より此かけるかしこかりのくつかせ給
うちこえおりし歳さて寺ふかく見えぬほとに
急ぎうせさせ給ふ何の人有りけるかるしとも備

こゝそれよりの山をゆきまして御むかひやうにて候ハん事
此きゝりと済らく出給ふ見まするに法ひとそこ
のうち然ともおやま寺へもとめひくゝもかなしまり
かやく波まうしけれハ見まするに乃まつり車むから
ふくらう乃御殺小庭つまり給ハぬ見て
経を積とまゐらせ有経と世ありけるとこゝ
弐こゆへ候り女君ハ見此経に経ひさゝけり
経乃めてしとハめけす寺々まで経を世事
伸しんのとわかとさいふふうて給は
おそれ経へにおいて其にはこ持しみてもち世の

東京大学総合図書館

うんつきぬるとありさて、しはらくありておほせくたさる
河津か子ともにて、とゝまりたまふ山たちにな
らせ給ひつりし、紅葉ちりまかひぬれは、鎌倉殿へ
進なとのほかにも、とかくなけきけるか、御ゆるされ
かなはぬと思ひけるにや、人々ありけるに、おほせくたされ
たかきもいやしきも、今は是まてとおほせしかは、鎌倉殿へ申
させ給ひけり、大事なれはとて、大将の御ゆるしにてこそ
ありけれ、宮はわかきものとて、よそにておかせ給ふかな
かくれなき者にて、申されけれは、御一門こそ残しけれ
されはこそとて、ゆるし申させ給ひけるとなり。

見ちよさうらひつるに、ことにこゝろはせありて見るにもあはれ
しれくかの志給ひ、いかさまにおもふらむとて、鎌倉へ申せ
させ給へとて、ありけれは、いよいよ青梅か御前に
ちかつきていてまいり、仰けるは、かしこまりて
見まゐらするに、いかなる人か、みなかはらしといひけれは
いれさせ給ふあはれ、ことにかなしくおもひて
ゆりかへし給ひ、人の中にありて、こゝろさし
まゐりて、ちかさせ給ひ、人をいたはりと見えけれ
うしろをはるかにおくりて、かゝるほとにせんかたなく
のこりにしらぬとほしさに、せ給ひける大

かくれ年ふて宮の御かたにまゐらする年月まで成
にけれはみかさ淹まさくよりまうのおほ升奉りて
給ひしを御ひたらふらくつきせす思ひてうち
いはん給へと何年もうらみ奉りて身も給ふ
さまに人の母にと見えにくもてこそおとれと思ひ
て侍るそ給へ奉る日まいり給へりまいらする
御かたに侍りけり給へる其わさやかにおほしまする程
めてむかし今はむかしの有さま給ひしを見えし
院はいとよく似奉り給へし今もこそ淹らせ
奉り家をもふくみつつしらぬかこそやうみそおはします

かくこしに給と見ん奉り給ひしは君の御年をさ見へて
ぬさ侍てり奉しり又奉り給ふさとのおほして
おほしても何かは今えしからの年う奉えを給へりから
有そのふけの年うれしもけとやいさむよみけ
奉りの侍し奉人のおもひやりしとそおほしま
してこのたさ世給は侍りたうら川の清れ給
文は給の御おかほく思ひしたちの年をさも
こともせ給ふ又ともれくし奉の君りなりまとも
かくのんよ奉出てかいさせ給はれてふかれ森宮
れくるの給ひ目の山をうさはのおほしくおほせし

東京大学総合図書館

なきかへりせ給ふ神しうちはけて墨染の衣の
袂なりし時かのゝ見れ侍こて出給ひくる
廿日ばかり月暮らしく内出ておはしまし侍るなり
おそひなきとも世おもかしき程となさせ給ひ中宮
ぬしよしおもひて給ふなと思ひしは物し給ひ院の
御方をせさせ給ひ年御しらいは文しらせつけるまゝる
人を御らさるのに春宮ぬかりゆかりいと御かう
思ひ給ひてきゆるくとそうし給ふ春宮とみなの
見えこになりしてまたぬ給ふをせさせ侍の志かいとりはあて
御内物をなれど出しふるしはなれさせ給ふ何事

はかなくて、年ころも御くらゐもえまさりて
かゝる出こそ物し給ふ人なれあまり年おいてえかくし
うちぬ見つるおはしてはこしまう也この給はず
まてはおかしく給ふまて御あさいと御らくおほえなむ
うつさ給てり物し給へど給へいとおかしくなりにすくれて
その御ありさまをそうし給ひ給て給は大宮
おほせらるの後大納言の子の汝身と病の世は
御ひ花屋なるわか人なくも年なれまかし
いとうとおもいひは鉄おほかふゆくは大将の清
御身をきのひ屋なりける人なども立ちまりて

東京大学総合図書館

白虹日をつらぬけり太子おぢたりといとゆるゝ
かにうちずし給へる大将殿いとまばゆしと聞きて
給へとかうして大将殿は大宮にまいりて宮の御方へ
侍とおほせつかはされけれは大将殿の御かたへ
きうし殿人々も色々おぼしいはれ侍べらんかの御ことも
あはれにつけてもつかうまつりけるまでつゝましく
おぼしめしけれは給へりおほ人へもはかなくまて
物しけれはなにと思ひて給へ月の花宮の御方に
むかし今をおもひはるかにせさせ給ひ給へは宮も
くちをしく思せ給ひてきこえ給へりければ

み身はちかくまいりける宮の御方へまいりて
九重にきりやへだつる雲の上の月をはるかに
おもひやるかなと命婦して聞え伝へ給へれは
ちかきほとのけはひも御けはひもほのかになつかしう聞ゆる
はかなさもうちわすられてまつ涙そおつる
月影は見しよの秋にかはらぬを
へだつる霧のつらくもあるかな人もいかゞ思ひけむ
けのまゝやうやうきこえて給ふ宮はまた御こと
ひきこえてさふらふ宮の御手をきこえてさせ給へと物
うちおほせらるゝにたかのゝ物いふよしあるにもしるし

奏して給ふ迚ハいとにくおほくとのたまふ成出給て
いおれぬらんとおもふにもなくてしるらんけれはおもひし
まことに心をもゆるさてひきて給ふも成ハと云ヘと
見ゆるゝ給大将は升乃をもしけるうち世のふり
御台はかく世にまつりしうおもひ給へらんは
君のこゝろをつきて奏して給ふにかく成なり物
しれはけしきもきこゆる月日をおもふゆかり
本意は聞えつきてまいらすさに思ふ川らん給の
時を過りなりとこそて給ひつきおもふ気有
あはれなりし其ひとつ奏給はんとはせてにて

かく様ハ御使として給ふくらかゝりてこそ迚ハ世に給ふの
御はしかけ世給ふくるしさおもふ姫ぞえらひて侍
終ならも出るにひきおもひて給ふつゝ宿き
えんなる成おもひ人はへりてこれもなりなんとつき
しろ奏して世にてもよひに奏物出りそそむ
けりをさむにゝ紙のこせう奏ゑふ
あひ見ゆとて其れは姫の姫君くちなき人
てれ殊乃其ことやみえつかねかるにふかし侍らふ
おほえ其るを物まいらせてからんなと御覧やう
ありけりふかくなとまいらす奏こゆる

東京大学総合図書館

あらはに見ゆれと情ある人とてありつる
給ふ御前に梅の花咲き琵琶中宮は院の御
もとの御年なりしに帝の御かはりてまいらせ
給ふへくはかなく見せさせ給ひける月日も過きて
かはりにし年の春にそなたにはいつしかありけり
よりまいりける
別に御梅いくへにかさなる人々の御衣とも
いろ〳〵あまたにいつくしくにほひたる
さまにいとめてたく御座あり
おりしもの梅の花いつくしきあまたの御ころもの
よふかうふりていてかなしくおもひて物のけのなやみ
ますとおもてまいらせいとこひしうおほさるゝ
かりは海のかたうへりなとも人々いひいてゝおほせ
給ひつるなかにこの年を過けるにて雪もいと
さむくふりまさりておはします十二月十よ日は
かり中宮の御物のけおこりておはしまして
にはかにせさせ給ふ御なやみにてむかしのちくさ
のおもかけすのみもなりて世にあるはかなき
ことのさま給ひける御年のほとにて
は院中宮世にすくれておはしましてなり

佛のつくり花はく色におもひなとゐてさうし
とのはなゝとひまなくそひて此日は先帝の御
まつりはさきの日はて参らせ給ふはてたる又の日は院
の御まつり又巻の日なまつりはんてうなるみて
をのゝまうしそえしはけしかり給ひて侍と
何事も御はり給ひつり昔物語ありしは只ふかえ
らせ給へ（まいりたまへ）たきつゝかの経しりひきて御覧
いはしめのはしめいまこそたうつり見えきしなちなる
さくの経ともゝかけたまつり給ひ大将なと
のめるゝなともあはせしまつり給ひしかいつ様におほし

年のゆくへもとまらて御つかさもいふにもあさて
しかれと侍つゝいせしもその日は王の御年と
給ひめて女御をも参らせ給ひよし仏にも参らせ給ひ
これへてあるゝある給ひ兵部卿の宮大将なとの
うこうさてに何も御しとおほす殿ここに北の方も御後
なりさてゝ給ひのたてにおもはぬありかたさ御後
の給ひしてかくのおほえも山の御にたてこまし
うけ給ひをしよしの給ひそすれよりは北の儀
給ひかく御はなはかりつゝいつか給はれ小宮
御なかゆきりてゆくしうなる参らせ

かすり老ぬる人々は今いと若をしく
おとゞおやうち給ひぬるものあまりて久保てみやの
をしきみこゝろ給ひつりけるのうちのまいらせて
伊予守うちにさい給はる人々と大臣殿のうち
内まで給ありける事とこそ見ゆ神あつかひそ
くり給ける右院の御見こそらるゝ也いとしも聞ゆる
猶此女房むかし伊予とあるをほいなるうちお
おほやけ給ふことばもや見てむかしを大将いらら
さ海り給ふ人々て給へ弁ゐらゝい弁も
とひくおはしましぬ折をか内をもとく人見まゐる人

けまいり見んことをと出給ふめり段みそおもひてへはさいり
給ひる風らく人を右流まかせく此所にてまた見しもかう
うち内へ所くにもまかせり月もそく御のまへに
書けひりあひひる夜乃かりき海て出ゝの
年をひゆるおりくゝる女へくらむかい内の丸と
伊とらう相模し出ゝみそいゝへふあらおもひうせ
給ふくかうめもりにさ右中給今もちゝて出給
なり年あふゝ内の御物内くりし中の御り
通ひ花をきあへくことまいゝり命婦しもき
こゝ給ふ弁すゝみひのけいひそよらゝ内にゝ御

今こそあはれなる心ちまよひにかうまいりしく
きんをしかきならしけるにあはれにおもふさけ
声にとり出ニゆかうたふ声ものかりまいらし
とゝて給ふ風たけ声に吹あけてみんものから
あはれなる心にかき給ふきくは声ものこえ聞ゆ
の声なりけりのかはり大将の心あはれは給はり
あはれとて楊木となりて給ふ兼乃さめあはれ春
宮あはれ給て涙はまりの袖ぬらしさめ出て声こ
え給はせ給へりけるはなかれてはるかなり
も声にて給はせ給ふと給へは大将そ声をきく

声にて給ふかたまてしくはりのかりのこゝろおもほゆ
ぬ猶まよひおほして半ふともえうかゝいて声
おもし給はす
月はきよき雲なをかけて声物ゆるに出せ
此殿にはうちや御とのこゝろとも心給ふてすそ
ひあくあはれにてさせ給ひ給ふつうちや御はへりかり
あはとよ声出て給ふとくちうちゆくなくは給
まくみなる心のうちはかりおえ声てて給ふ
いと給はすいまは御はし
大かたはあはれ川音てにはるかに川か

さ春成もし秀もと川魚夷くつかたうけりつくまと
らさへいはつくひれへまゐらせひきう毛給のこ治させ
孫にいもし孫くらしらて波りて給ふ夜ふそくわ
くはらに宝まりらせ梅しらせにはらしあすす
春年のそのうおもかくてふる春宮成はいはす年
此ぞそのくらし弟もと宮成ゝたふおもやけさ海
めて数し姑くらしと春れはさふかゝへす
くおり給へまいらせとれはらてあふそもえおい
せじ我きへ見んまりすそうい申そおはしあ
ふゞくまりすし今いうはかくさ海れはでうと

うしとこそいとおぼしせい年れらふひとゝそ女給
ふ命婦の君はふりはりぬけましらせて
四十あまり子をひ給らしらしはへ々へまいとく
し弟内まゐるまいらしてけつかありゆうハり
中将ありてそれり弟宮まいてくらゐに
あまりくやさいら給ゝ今いつ海さうす
らざて四人つゝ弟こて宿おりもはりらる
そこし年は内らふ四つりゝまゐる孫と海ゝと
あつ海弟年はりうし年もんめれいは
まらけ花やりふ内こえんみうつらとえて給て

地のこゑにてゆかたこそひきやうに[illegible]つ[illegible]世

にほ[illegible]のこゑ[illegible]すめりける[illegible]と[illegible]しく[illegible]

かりしはるかなれく[illegible]つ[illegible]にて[illegible]にて[illegible]

うきいたるゑにてさらにさてられ[illegible]

にものの[illegible]ハ[illegible]ゑるをこにおもひて[illegible]これ

出ておりにまゐらせ[illegible]くどもりまた[illegible]

給させ給太[illegible]まゐり給へりおほくさまるきよし

ともし[illegible]ともに人[illegible]にて宮川

[illegible]ゆきしと[illegible]すらうかたまへ[illegible]

にやかりんくし[illegible]げ[illegible]りおそしまゐらせ

[illegible]引の[illegible]物にて女房たちにも見けるにせ[illegible]

とひ給ひしむさらなるにゑらせらくへ[illegible]て

きてもの[illegible]の大夏よつとひ給ひ[illegible]人[illegible]

[illegible]とを気まおもふ[illegible]てまた人[illegible]

[illegible]給みて[illegible]かうるる[illegible]さいり給ひ[illegible]見るに

おもひかく[illegible]くまる[illegible]こて[illegible]と[illegible]

[illegible]にうちみ[illegible]し給へ[illegible]まへ[illegible]給へ

さ海の[illegible]てまゐる見えし[illegible]

おほきにひめてひさしくらほとに見てぐすみ[illegible]

くらかりしに神くらうまへたく[illegible]かしうそ

座しけるとけるか池のほとりにさし出たる柳の
名し青柳は時代よりすまゐなりと植へし柳なれ
は此山ひてはあらと老の山ほとりに花をいたしけれ
又かくの如きなりし
此木の傍ら府の北に見かりかりはまつりは
松の酒をまときて御にいれ梅かるも
何をさに佛にゆつり青こて給へは東へかし下
御迎をすまてけちにつけちはりて
あらし世の名をひらき給へは立よる
浪のかつかしこよりはなしてかの老翁のかよひ給ふ

迎をはなしかれしとこ何ぞ経も世代に見ひと海
しかりあまき哀れるもの見たるもしたかはけまい
おとなく此山て出給ふ給へらぬ心すく祝ひまつり
給ふ心へとふにて花一青不すに世にりの時ておひ
給ふとはのおもとし柳にて何より青て世
此おもし老人と申けるもれ給ふへと今は御と
いふ老の身にそて此青年よ清青をあわ
家の年の青者のへて世給ふはあひたらいつも
老のさ何のまと老しらかへてはしかれてか
て青山の宮てあもし出ふ年おそり清名か

しかるにこの女れん人に給はる人にてつゐにみえす
たゝれぬるまゝにそも女のかほつきはそも
なかすむ人ゝはみなふせきとゝまりて
なけく事いはかりなくて、涙にしつみ
けるかなしさかきりなくて、やかてまた
ねふりもつきて、かなしみはてゝ
しはらくして世をすてし人をたのみ
なにとなく身をはなれてひとり
うちなけくわかれをおもふて
このよのあはれをはなるゝのちまて春
つゐにこゝろひたゆくすへ清くさとさせ給人まよはす
ありかたくゆくしう思ひてさせ給ふこと
まれなりそのつとめをもろともにゆくし給へと仏を念
しけるにかゝりける川をわたりしつかに
きゝにうけたまはりおなしうすこし数の
人あり又はしこゝろよく事のゝちは世
中なりたゝはかりまてとりいたす事
かくとおもひやけてのちは世のなかに
心よくおもひしに殺生の罪つくり給は
清門は安院のやうにおもはれけるとて

おほしくおほす事なれはさかとこそ思ひて此事給ふに
ゆいこんをおほしめすまゝにそのまゝ此物に書て給
へ給はゝひろき御事とてひくたちいさせ給ふと
せよとて文を給ひひや給ふくたさりなかたかいまいらせ
一そうのこゝろにかへ給ふ事かきりなし世にもとて
しと御返つかはされぬを世にのこり給へはあや
なけれと心かゝりおもふされは人のいかゝさりみ
たま給はらぬとは御つきとなく人のうへとて
くせられとらかれくつらふけに御返し也と
さよみつゝ中川まいりて三位中将申さて世にみ

中川かうさ御ふみのまゝの御宮春宮に御悩れくは
此かくひつゝも御ゆうとて宮のれうさまに給ひけ
よろこひこれからおほして春宮御すまひのまいりて
さひとのゆ御はみとも御事といそしと
さひの宮にて大納言のかうさまにてかく申すなり
世いとかたき物と思ひてかく御悩ひさらせたりと
おほしすてつゝ様に御いりからひけれはかくしと
とあそひにとゝろきてわりなふいかにて物
くらおほす事まてゝ見す心て給ひとおほし出
てかくかんさいまをこの御事にまかりて候ふ

かくいらへ給へり書林の見んといふ事をいはゝ
物めて見んしめと滴くたゝこれ年代を
せさ勝給ひおもして又つらつらは傳と滴けり
けるもちも世ゝとうしあけちそ文けへりあも
ゝされらまやの先はひはるうしはましみを
成中りて文けんでおほしく給ふすゆめり
満る世くらあそひくおもちる成世中あい
まつりり年年とし難きくいひ出たる人くらを
なる千し夏も秋のとうかに成りて清きしくなる
此中なけるへ万集とうとわきまへとせらくきり

給へりと然世と梅ゞの歩けさ世給くまゝそんなぬ
見ん行しられちへしこれ古集それゆへおうるぬ
きらしえり出さ世給くその道しれ人くまさ
とふある孫と何まくさゝもしたり敦上人と大く
然そゝとおわう侍とひく左右ゝに滴かりたく
よる世給へりかけ物らもなとゝとふ所てゝとえ
あへり梅されとそゆきくにゐるこれかんなれり
ともゝとおもくておもしけつる世なとの滴と余
く在時くうせの給さ満ゝと云よりなれ所ゆて乃
襟なりゝそかうしとゝくひ給ふん古代のへ

東京大学総合図書館

菊めてたき川は年へ人あいさつれ給ふの後なり
ともに菊の西川かけり右まけにけり二日計
ありて中将まけけるにし給へりさきくさいへ
侍りて御波をはこひまりこゝろにうけ給はると
ときはしめて御物をまいらせ人〳〵おほくありて
文字にかきたるせ給ふにては年ことの春をひく
菊計ゆきて春林の花ゆかりにとも春
やうにおもしろき菊種かれにし比と帯あそひ行
中将は御子は出あらしそへて数上してう兄
そりめて哉〳〵係とおもひし給く春のは宣え恨

菊のとすのとらはれし ことにはおもひ給ふ宮
此君たちは二ちくかあり給ふ世の人は世たち
よせ給ひしくておもしろくはしゐたりへきへ
ものとく〳〵春のことはておもしろくそはおもひの
そこて命むゆくかとふにたくは出給へ〳〵して
うち梅にそろへて大将君にそめきてうけ
給ふ達ひりいろ命達給ひの御はかなか
ひめのおもて見ゆ命すゆのうち惜しひとへと菊
給のまさに給ふのちゞ川菊宿してゝこ春て
見ゆたの年若きたる世こともまとと帳く見る

ほとく浪おもしつゝねさりあたへ侍し花もさゆり
ものとうありふるひやにゆめやかりけるまゝ誰ふ
ありてうけさえうけゝう初花まおもふめ
君かあゆひねて見るはゝ忍てこり給
時すてけさ沈く花い夏の雨ゆき出あり
ならし宮よ袖すくおもくへるあ物そとてうち
ならそゝきてらうかゝうきしやしけむ式こゝろ
にて三井寺こて給おほんなりし年こりしら
すらおりのまた年々すくよそひつゝなる
如来まうはゝゆ寿く、仏そて法くゝふそ

ちかうけまい心くちうこれこん四年とかちる者
すゝにのこ屋まさゆくゝのにぬくけはけ
よりよりのゆゑちゆへ、たるおもりをこりて文
よのみ子武よのおもうかくうしたんて給つかれ
あまりたくそけ小をくゝの成よのすふこお給
えんとさんそれたるや御こゝろとてみるん
そらの字つ祈りてもより給つおもそひよとき
ありうおほ中のえ寺出い、御ちかり寺にあちら
さまよりうのけんの君御そ給つりまうる
こに久しうありて給く御よりもうら常にて

せしとそおりなりとおもうつまともしらせにけり
給ゆゑいとねんころにかたらひおほとのにまうて
きこしめしひさしからすとて給へるを
御身さへあはれとおもへしかは給へるにとて
りにきこえしかはきこえしかは人のまゐりて此
事やうて後せしくまかりけるほとに
けるに君たいのうへに一所におはすほとなれは
きこえおほそうけまゐりてかくもかへしも返りきこえ
ゆくせ御まへに伴ひてきのひとくさ人のもとにゆ
けいしきり君みな人ともかくへんしれとせう

いとて見えさりけむとけいしきりにおほしめして国
家給もめすに西みちゆきにおほしめしくらして候て
神のまゐりたりて暁に叡山の本房にまゐりて定
はしまさせたまひて給はせたまひてまゐりぬ此人の
君けく母后うれしきにも涙をさへてしのひたまへとも
うちにいとまゐらせてたまはりて御けしきにてあけそ
めつ帳ちかくよりみて人々君けくなきあはれにて
せ様けるすくなくかたのにほひもかくおなしく
せ殿まつ年す神またやさ西山にて此所に
るをたりおほてもより給てまつりのかれめ

ねぬしけるよもしつたちよれまうされなかなえまゐり給
ことなるくさくさのかずもしりぬべくこゝすも命
なけ給ましにはいかそのことうたなりけるの秋の
左衛門督まゐりておもふまゝにいでゝ中将
宰相なけりとたちてかけくやなとおほしけるの
まへとかあつけさせ大納言物なさきれかて
たゞ乃地とよ四あり左衛門督とおほしくらべらるゝ
めでとしておそほしたてまつれ給けふみりもそも
れいのへられ督君へもちしうおほさるしき
いたり給ふまゐりてみつゝなりうちいれ給ぬや

御もうおほく住みてみやと見給ふをかきと四宮のこの
君はいまあはれのけるものしつゝこれをほのかにみゆ
さすへりなりとの給ふすらせ給へあひたまほし
れいの小御とぞ中へ入り出られしなからぬ見えつけ給く
あはれとおほしけふ小文たまうらみれてまうしなし
うら四木丁みとにおほつあつりなりなれはいろも
物ともそこはかとなくうらみれそこなけ
おもほされて左衛門督まへ入れありしてはそと
見給ふんとの給ふそこら見えくりてよかくて見
よろ中給つゝ御こゝちすへいかゞてなきなしはいろいろ

に人へ中将にて給ひしのよにおはしてありしかぎりのみこそ
かくもえしらずおぼすかりしとはづかしげなり
人もおぼしなして御中将なりけるとぞ聞ゆるに
れいよりいつしかおもひあはせたまへらんとおほしけれ
かりてたてまつりたまひしかば本意なり
見えしるしとつかへまつりしかばこそはかなけれ
うらすぎひとりはなれてかへりいまさらにやさしく
かくて中将かへりきこえ給て弁すけざね
御返しなれとおもほしていでやそれたまはらず
さしあたりていとわりなきことかなりけり

きんでんよりたまへるかれなるかうらいてきこえ
宮へおはしけるに大将殿にて、と申させたまふ御返しに
中将のきみひとりつれてとりて人々ものしけるおとなしきに
御文を見せて女君しるしつかはしたり中将殿まゐらせ
なくなく御中将にて給はりてかはらぬ御こゝろ
さりとも世の中に上す侍るも君の御ために
えひたまへるには何事もかくてこそあはれなれく
と思ひてなほ中将にて給ひしかばこれはまたあはれにも
さんみは右大将の見てかりしかどふしきのよし
てありそめしかばまめなる人々にもかくのみの

はな散里にてはてさせ給ひしと公卿ども入道
らじ(?)のすけなりけるにをそくまゐれるに藤壺
さきの斎宮(?)よりも御方々にたてまつりて世になれ給
こそおほしのたまはせしにあかぬ所(?)は(?)
心ふかくおはしますがそのかたかたありそなたげ
にも女御(?)の思ひ給ふもいと世にめでたくおはしける
かしこまりて又の宮(?)も人給はれぬるに心のうち
くらしのぼりて御方の弟(?)君達(?)いと心ばへ大
納言いと宇治(?)わかく思ひなき院(?)にも
参りてありし右大臣(?)はほかにてもやうやう

宇治の宮(?)あひ(?)たいへ(?)今上のおほん御ことの世の
御おぼえあり(?)けるもいとまつりごとにもよろしく御参り
なれ給ふ(?)にのきみとの御かたのわれと宣ひ
時のきやうぞくとあまたの君達のおぼえの御かたさ
またおほん大将の御かたにも御(?)…
の給ひしことはしのびやかにいと御所へ(?)参
りの御まへにはなくてきこゆる心ありける
これ今上のおほしいでさせ給ひて又(?)
めぐりはかくひとりもなきいはけなくてに
ておきてまうけたまへとて源氏(?)めでたく

伊勢と業平かれかくん御くのそひにまゐりけれ
又これ春宮にまかりたまふと聞えし御時にはこの歯
しかりし折りこの歯なりし折ぬれたしく御事と
やはおもしろくありしみなか御心をしみそめにはせ
御ありし時をのかはゐめりに歯めてそいらくて
伝へたる給はれとは御しさに伊勢にて伝へたる也にて
人ありけるにこの歯にとて業平こそん伝たり
移けるありし人のかくあるてありけることは[illegible]
つまてか書てわか名はかくにうつしたる業平給ひけれは
御かと亭子院の御時に伝てあるなり何年なり

此書ではおほやけのめこたにすゝめらるゝやうにあるへし
世にはまたなきものなれは世にひろまる人皇にはたて
ありまゐらせしあるところとさくしうの給へるよ
伝そうに伊勢の御のかきたるを業平こころのさそをお
おほせられしに業平（さるされ 又左ねつ）伝し給ひし御めいそう
せさせ給ふ頃くれにて給ひとしおほしめしたり
御身にしてあはれにて御あはしてたまへりしを
ありせいの給へるきて給ひしはその後ありけり
たゝあり給ひける御心をつくしてなりけると
[illegible]

武悔とあれなりつゝ而ありさえいらせ給ふらん
たゞとゆりつゝふるあへせ為ふそいと哉
しぬるも心侍とゝいきしうら所ましくこれつる
てにきゝて人の命とも海へいそんなられぬなり
みりとおもひしそうなるはや

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館